

北九州大学文学部設置への期待と帰結

-教員・自治体・学生の側面から-

筑波大学大学院 野上 亮

1. 目的

1960年代当時、文学部を設置する公立大学は主として女子大学である中で、1966年に共学校として文学部を開設したのが北九州大学であった。この文学部設置に対し、どのような期待が寄せられ、またどのような帰結を迎えたのか。この点に関して、具体的に明らかになっているとは言えない。そこで、本報告は、教員・自治体・学生が文学部へ寄せた期待を整理し、それぞれの期待がどのように絡みあい、結果としてどのような帰結を迎えたのかを考察する。これが本報告の目的である。

2. 方法

分析視点として、教員・自治体・学生というアクターを設定する。これは、運営主体・経営主体・受益者をそれぞれ表す。そして、この3者の期待がどのような形で寄せられ、最終的にいかなる帰結を迎えたのかを論じていく。方法としては、大学史及び同窓会史の資料分析を用いる。大学史のみならず、同窓会史を用いる理由としては、文学部卒業生の回顧が、文学部への期待を記述していると考えられるからである。また、行政資料・議事録も適宜用いる。

3. 結果

教員側の構想する文学部とは、「文化学部」としての文学部であった。この「文化学部」としての文学部とは、社会学や心理学等のアプローチを適用しながら、現実の反映として表象を理解しようとする営みであり、したがって、彼らの構想する文学部には当然社会学や心理学の講座も含まれていた。一方、経営主体の北九州市は、文学部の性格は「産業の発展および社会開発に対応する新しい任務を担うべき」ものとした。学生及び受験生をめぐる北九州地域の高等教育の状況はマス段階に入ったとはいえ、まだまだ進学率が2割であり、学生の教養主義的欲求も高かった。そのため、彼らが切望した文学部のあり方とは、まさに「アカデミズムとしての文学部」であった。こうして1966年に誕生した文学部には、国文学科と英文学科が設けられ、それぞれ社会学や心理学の講座も設けられた。国文学科と英文学科という学科配置は、学生の教養主義的欲求を充足し、また社会学や心理学の講座を設けることで、教員側の期待と、市側の思惑が一致した形となった。しかし、1年後文学部は教養部を吸収し、化学や体育の教員を抱える雑多な学部となり、また大学院の設置も実現しなかった。三者の期待や思惑が絡み合った文学部は、早くも挫折を迎えたのである。とはいえ、彼らも手をこまねいていたわけではなく、学生は他学部よりも自主学習・研究にいそしみ、教員も努めて研究に励んだ。こうしたこともあり、文学部から多くの教員が輩出され、彼らもまたアカデミズムを地域で実践していくこととなる。

4. 結論

教員・自治体・学生の三者の期待や思惑が入り混じった形で誕生した文学部は、教養主義や文化の欲求を充足する構造は未完成に終わるものの、未完成故に意図せざる形でアカデミズムを育てていったのである。

文献

橋本鉞市, 1996, 「近代日本における「文学部」の機能と構造」, 『教育社会学研究第59集』, 他